

筑紫（九州）の萬葉集と風景画シリーズ（第三十七回）

かま

## 「嘉摩三部作」

・福岡県の中部にある筑豊地方はエネルギー資源として石油に代わるまで使われ続けた「石炭」の日本有数の産地であった。この筑豊地方に万葉歌人・山上憶良が作成した次の万葉歌が見える。

・「神亀五（728）年七月二十一日、嘉摩郡にして撰定しき。筑前国守山上憶良」と記される「嘉摩三部作」と呼ばれる次の三首の万葉歌がある。

【〜惑へる情を及さしむる歌一首〜】

あまぢ

1) ひさかたの 天路は遠しなほなほに

なりし

家に帰りて 業を為まさに

巻五―802 作者…山上憶良

（解説）あれこれと思いどおりにするもよいが、おとなしく家に帰って家業に励みなさいと説く。

・惑った情をもつ者が正しい方向に反させる歌である。

・つまり農業を勧める国守の立場から民の実際にとるべき態度を懇切に示した歌といわれる。

・嘉摩三部作は山上憶良が筑前の国守（地方長官）として奈良の都より大宰府に着任し任地を巡察の折、嘉摩郡を訪れた際に郡家（地方役所）に寄った際に撰定されたと

の説がある。

・山上憶良が訪れた嘉摩郡は現在の福岡県のほぼ中央に位置する筑豊地方（遠賀川流域を指す地域名）の南部にある嘉麻市辺りとの説が有力である。

・嘉麻市一带は日本歴史地名大系には【日本書紀】に「安閑天皇二（535）年五月九日条に筑紫に大和朝廷の直轄領、【鎌屯倉】（後の郡家があつた所と同じ場所である現・稲築町蒲生を中心とした地域に比定される。）を設置」したと記される古くから開けた土地である。

・古代には当時の九州、壱岐、対馬の九国、二島を統括していた大宰府に近く、また、大宰府政庁（現・太宰府市）から嘉麻郡を通り周防灘沿岸を結ぶ官道が貫き、瀬戸内海の水路で都ともダイレクトに結ばれていたが、その交通の要衝であった。

・嘉麻市は北部九州最大の河川である遠賀川の上流に位置し、嘉麻市内（稲築町鴨生）には古代、嘉摩郡と呼ばれた役所址推定地である稲築消防団の前に「役所址」の碑が建てられている。



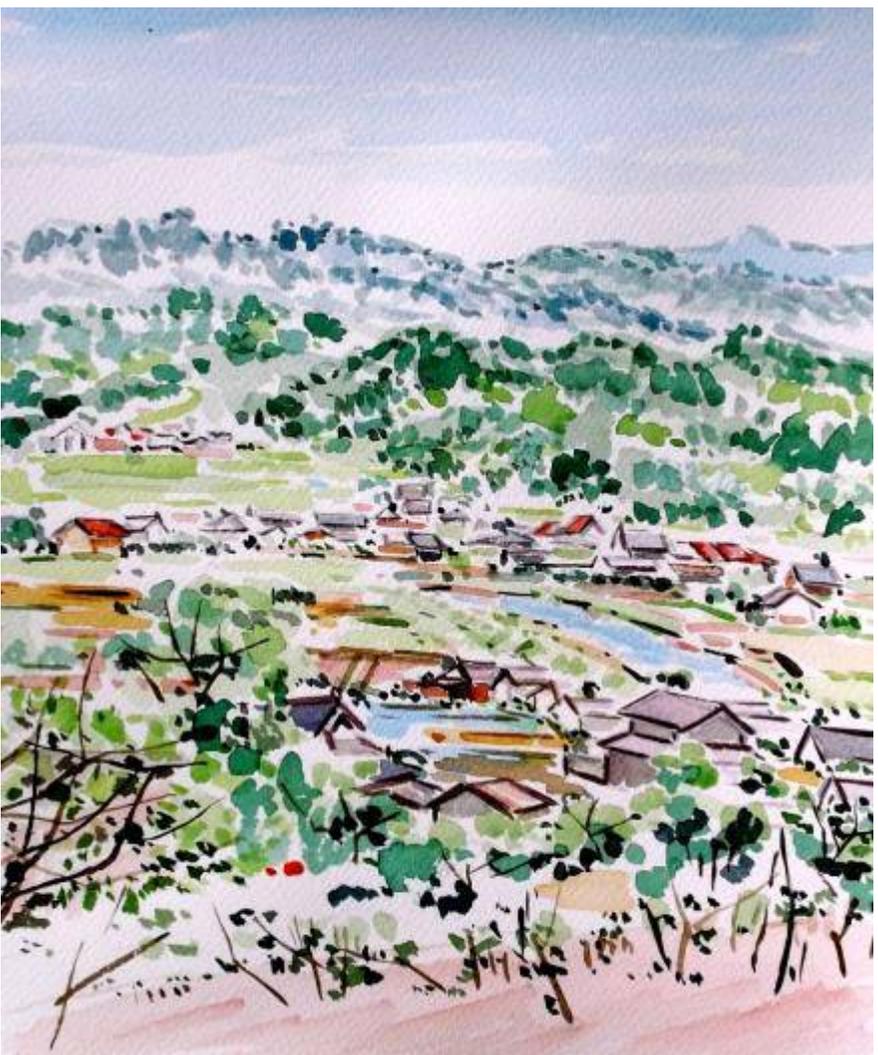
・嘉麻市内を流れる遠賀川は嘉麻市の南端にある馬見山うまみ（標高978m）に源を発し福岡県の中央地域・筑豊地方の平野部を南から北に流れて山口県西方、福岡県北部の海域で関門海峡の北西に続く響灘へと注ぐ約61キロメートルの河川である。

・嘉麻市のある筑豊地区は江戸時代頃から各地で石炭が掘られ、遠賀川を使って船で各地に送られるようになり、流域の炭鉱町は日本最大の石炭産地となったが昭和50年代から国の石炭合理化政策により筑豊の炭鉱は姿を消し、今は昔に帰ったように遠賀川周辺に広々とした田園風景が広がる。

・嘉麻市の中心地区である稲築町を歩くと山上憶良ゆかりの地らしく公園等（稲築公園、鴨生公園、郡役所址等）に憶良の歌碑が数多く建てられている。

（写生地）・山上憶良も任地を巡察の際に見かけたのではと思われる嘉麻市の南部（嘉穂町）平野部の中央を曲がりくねりながら流れる遠賀川の最上流風景を豊臣秀吉が一

夜に築いたといふ伝説の残る益富ますとみ（一夜）城址の丘の中腹から描く（池田杏花）



【く子等を思ふ歌一首く】

しろかね

くがね

まき

2) 銀も 金も玉も 何せむに 優れ

る宝 子に及かめやも

卷五—803 作者：山上憶良

(解説) 金も銀も玉も、どうして子というすぐれた宝に及ぼうか、及びはしない……。

・この歌は現在、我が国が直面している人口減少と少子高齢化社会の急速な進展が著しい時期に相通ずる歌だと思われる。

【く世間の住り難きを哀しぶる歌一首く】

よのなか とどま

かな

ときわ

か

3) 常盤なす 斯くしもがもと 思へども

こと

とど

世の事なれば 留みかねつも

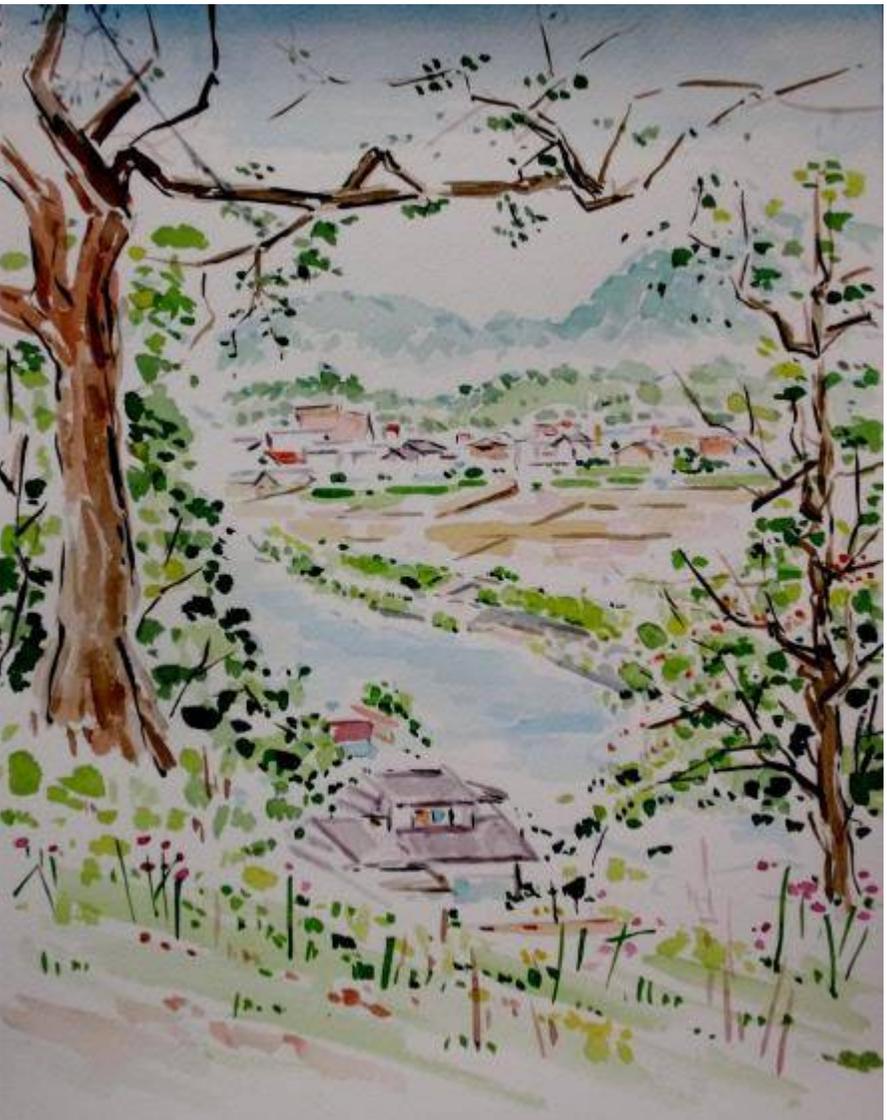
卷五—805 作者：山上憶良

(解説) いつまでも変わらない岩のように、人のよわいを変わずにおきたいと思えども、人間の世のことであるから、とどめおくことはでき難い。

(写生地) 山上憶良が嘉摩三部作を選定した所と云われる嘉摩郡の郡家があったと

ころと推定されている嘉麻市稲築町鴨生方面風景を町のほぼ中央、遠賀川(別称として上流部は嘉麻川とも呼ぶ。)左岸の天神山一帯の丘陵地に位置する稲築公園(稲築

町岩崎) から描く。公園下を遠賀川が響灘に向かって流れる。(池田杏花)



・山上憶良が嘉摩三部作を撰定した場所と推定される嘉摩郡の郡家、現在の福岡県嘉麻市稲築鴨生へはJR筑豊線の新飯塚駅からバスに乗り換えて行くか、あるいは博多駅前から飯塚行きの西鉄バスの終点で稲築方面のバスに乗り換えてもよい。

(参考文献)・角川日本地名大辞典・福岡県・日本歴史地名大系・福岡県、嘉麻市、日本古典文学大系、等

